

益々壊れる日本語

あかたにけいこ
赤谷慶子

近年パソコン及び携帯電話の普及により、漢字を書くに難渋すと嘆く友多し。これは日本の将来にとり深刻なる問題にて、これを如何せんと愁ふる人少なからず。

先週、大手銀行の擔當者に移動ありて、電話にて聯絡あり。「〇〇銀行の〇〇にて候。赤谷様はご在席や否や？」吾「はい、赤谷にて候」と返答。「御自宅におはしますや」と奇怪なる問を發す。意味不明なるにより、戸惑ひて訊き返す。この人、我が傳へたる電話番号、自宅なりや勤務先なりやと訝りたるべし。言葉は丁寧なれど、理解に窮する言ひやうなり。かくのごとき場面に最近頻繁に遭遇す。會社に勤むる知人に電話するに、應對せる社員曰く、「〇〇は留守の形とりたれば、戻り次第の折返しに電話にて宜からんや？」と。吾、留守の形とは、在席なるか、居留守の事かと質問す。その女性は奇妙とは思はぬ様子にて「留守の形になりたり」と再度念押しす。呆れ果て「さらば戻られたらんには電話頂戴するを得れば幸甚にて候」と言ひて電話を置く。「形」といふ言葉入りたればややこし。單純に留守なりと言ひてくれし方がよほど理解するに易し。

更に簡單なる例列擧すれば、さる老舗デパートにて買ひ物したりし友人、カードを探すも容易に見つからず。混雑時にて客多し折、若き店員より「お客様、なるはやの形にてお願ひ仕り度」と言はれ、あぜんとして探す手止まる。「なるはや」とはなるべく早くといふ意味ならむ事は見當つく。然れども、老舗の店員ともあらむもの、何たる言葉遣ひかと二人は嘆きたり。また、「お名前様を書きたまへ」と言はるる事も多し。お名前はすでに敬語にて、様は不要なり。馬鹿にせられたりかとの氣分に陥る。

うるさいばあさんなりと思はるらめど、「お名前に様は不要なり」と必ず注意する事にしたり。これは焼け石に水かとひたすら嘆く。

(令和元年六月二十六日受附)